

私もここにいますよ？

ジューシー肉壁

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

今は昔、幻想郷が誕生する前。そこには変わらず人の営みがあり、妖怪の脅威に怯えつゝも穏やかな暮らしを送っていた。

結界の管理者たる博麗も、当時は「妖怪退治の専門家」としか見られていなかつた。

そんな博麗のもとに、一人の少女が転がり込んでくる。

まるで透き通るかのような白い肌に、色素の抜けた白い髪。たつた一点、血のように赤く紅い瞳の色が、少女の纏う異様な雰囲気を現していた。

そんな素性の知れない少女を、当然村は受け入れるはずも……

「あ、すみませんお兄さん。やつぱり大根一本追加して下さい」

「ははは、嬢ちゃんの頼みとあらば一本や二本まけといてやるぜ。ほら、持つてきな！」

ないはずなのに、当然のように受け入れていた！

若干天然のはいった当代の博麗の巫女の元、少女は穏やかに成長していく。

これは、どこかの幻想郷がたどるかもしれない遙か過去の物語。
※何処まで進めるかわかりませんが、原作主人公キャラがでてこない可能性もあります。それと、オリキャラ、独自設定山盛りで原作の

設定を無視するかもしれないのに、苦手な方はご注意下さい。

目次

次

Chapter 1

1Lでたら死にますからね？

巫女さん巫女さん、お気を確かに

美味しければ問題ないよね

私は一体何でしよう？

博麗の巫女は人の心がわからない（偽）

15 12 9 6 1

Chapter 1

1Lでたら死にますからね？

ざわざわと、まるであざ笑うかのように木々が葉をこすり合わせる音が、私の干上がった思考に突き刺さつて恐怖心を増大させる。

まるで森そのものが一つの生物かのように思えてきて、その全てが私に敵意を向けているかの如き錯覚に陥る。

ひたすら前だけを見て走つてみても、左右や後ろから聞こえる音が怖くて怖くてたまらない。

「ハア、ハアツ……！」

呼吸が乱れ、満足に息を吸うこともできず。しかし足を動かす速度を緩めるわけにもいかない私は、潰れそうな肺の痛みをなんとか無視しながら駆け続ける。

時折見かける木の根っこに足を取られないように注意しつつも、スピードを落とさずにひたすら前へ。迫りくる悪夢から逃げ切ろうと必死になつていた。

——がさつ

「——ツ！」

不意に聞こえた明確な物音に、思わず背後へと振り向いてしまう。そこに居たのは、異様に長い腕と異形な爪をもつ化物。

ぎらり、と赤く淀んだ瞳に歓喜の色をにじませ、喜々として迫つてくる化物に私は思わず小さく息を飲む。

大の大人が武器を持つたとしても敵いそうもない相手に、幼く非力な私が素手で勝てる道理もない。もしも立ち向かえば、もしも足を止めてしまえば。それは、私の純然たる死を意味する。

やつてられるか。そう叫びたくなる気持ちを押さえ込んで、明確な脅威から逃げようと体を反らせる。

けれど恐怖ゆえに足がすくみ、乗り越えようとした木の根に足を取られて体勢を崩してしまった。

「あつ……！」

慌てるけどもう遅い。それなりのスピードで進んでいた私の体は、急な姿勢の変更に耐えきれずに大地へと投げ出されてしまう。

——ボン

丁度その瞬間、私の背中ギリギリの場所を風圧とともに何かが通り過ぎる。

その正体が何だったのかは、異形な爪を振り抜いた格好になつている化物を見れば容易に想像がつく。もし今倒れ込んでいなければ、軌道上にあつた私の体は哀れな肉塊になつていただろう。

だけど、状況は一切好転していない。

今の私には一度倒れ込んでしまつた体を起こす気力も殆ど残されていないし、たとえ起き上がれたとしてもこの化物から逃げ切れる確率はほとんどゼロに等しい。

いわゆる『詰み』だ。運良く避けられたように見えたのは、単純に一瞬だけ私の死期が遠ざかつただけにすぎない。

それが証拠に……ほら。化物が爪を振り上げながら、こつちに向かって一步二歩と近づいてきている。

それに対しても私はやできることはない。

できることなら、楽に終わらせてほしいな。でも、無理なんだろうな……

そんなことを考えながら、来るべき衝撃に身構えつつ目をギュッと

閉じ。

「あらあら、困ったわね。女の子に手を擧げるなんて、お仕置きが必要かしら？」

バチイツ、という何かが弾ける音とともに聞こえてきたその声に、私は閉じていた目を開ける。

私に死をもたらすはずだつた異形の爪は、何かに叩きつけたかのように大きくひしゃげてしまつていて。その持ち主である怪物には憎々しげな表情すら浮かんでおり、その視線は私を通り越して後ろへと向いていた。

状況を飲み込めないままその視線の先を辿つた私は、赤と白で構成された衣装に身を包んだ女性が、手に何やら長方形の紙を持つて佇んでいることに気がつく。

「…………え、なに…………が？」

「あら、混乱させちゃつたかしら？　でもごめんね、説明の前に片付けなきやいけないことがあるから……」

そう私に微笑んでくれた女性は、化物の方に視線を戻すと紙を人差し指と中指で挟んだ状態で前へと突き出す。

その時、化物が怒りの咆哮を上げて私達の方へと突っ込んできた。その矛先が自分には既に向いていないということは頭で理解できても、あまりの恐怖に身がすくんでしまう。

「ひつ……」

「ふふ、大丈夫よ……『多重結界・剛』」

その声とほぼ同時に、女性へと異形の爪が振り下ろされた。先程使いい物にならなくなつていた側ではなく、未だその異形さを留めた方の爪。

当たればいくら大人とは言え一溜まりもないだろうし、見た限り華奢ときえいえる女性では防御は絶対に不可能だ。巻き込んでしまつ

た、そう考えて私は思わず目を背けようとしてしまう。

けれど、その寸前で見えた女性の顔。そこには迫りくる脅威などまるで意にも介していないとばかりに微小が浮かんでおり、事実化物の爪は女性の脅威至り得なかつた。

先程よりも幾分か金属質な音を響かせながら、怪物の爪が何かに弾かれるように押し返される。

薄つすらと、本当に薄つすらとだけど、女性と怪物の間に立ちふさがるように幾重にも重ねられた不透明の薄い板が、まるで元から何もなかつたかのように消えていくのが見えた。

「グ……オオオオオオオオ！」

「知性も理性もかなぐり捨てて、本能でのみ行動する。實に貴方達らしいとは思うけど……だめよ、本能に従うだけじゃ、いつかは破滅してしまうもの」

言いながら、懷から細い針を取り出す女性。それを、怪物に向けて投擲する。

その針は見た目に反して強靭なのか、硬そうな化物の皮膚を次々と貫く。苦しそうな唸り声をあげる怪物にいきつく暇も与えないつもりなのか、今度は懷から大量の紙を取り出すと宙へと放つた。

「それじゃ、さよなら妖怪さん。『夢想封印』

不自然に虚空を彷徨つた紙が、怪物を取り囲んだ瞬間に何かを放つ。その矛先はすべてが怪物へと向かい、力の奔流に抗おうとした怪物の近くでそれらは爆ぜた。

ズン、というお腹に響く低い音とともに土煙が舞い上がり、それが収まつたときには化け物の姿は何処にもなかつた。

「うーん、まだちよつと扱いになれてないのかしら……つと、怪我はない？」

一転して心配そうな表情を浮かべる女性に、なんとか大丈夫だと伝えようとして体に力を入れた瞬間、一気に体中の力が抜けてしまい倒れ込む。

それどころか、意識に霧がかかつたかのように目の前の景色がぼやけていき、からうじて使える耳は慌てたような女性の声を捉えていた。

「え、ちょっと大丈夫!? って、体中傷だらけじゃない！ そんな、赤い服だと思ってたけど、これってまさか全部血なんじゃ……！」

いや、服染めるほど出血してたら流石に私死んでますから。心のなかでそう突っ込みつつ、安堵感からか津波のごとく押し寄せてきた眠気を前に、私は意識をあつさりと手放したのだった。

巫女さん巫女さん、お氣を確かに

きし、という木の板がきしむような音が聞こえ、私はまどろみの世界から意識を釣り出す。ぼやける視界に映る光景は、私の知らないもの。

「……知らない天井だ」

ふと、どこからか電波を受信してそうつぶやいた後、漸く意識がはつきりとして今の状況をはつきりと認識できた。

まず、背中に当たる感触が柔らかいことから地面ではなく布団に寝かされていたのだろう。その証拠に視線を下げてみれば、柔らかい毛布が体に掛けられていた。

次に、体を起こして周囲を探つてみる。襖と障子に四方を囲まれていて、障子からは朝日らしき光が漏れている。内装はないといつて良いくらい少なく、申し訳程度に箆箇がおいてあるだけ。

体を起こしてみて気がついたのだが、昨日感じていた痛みやら疲労やらは完全に消え去っている。適切な処置が施されたのか、それとも気がつかない間に何日も眠り続けていて、その間に解消されたのか。

そういえば、よくよく見ると服も違う。記憶にあつた真っ赤な服ではなく、見慣れない白と赤で構成されたやたらと肩口がスースーする服。

と言うか、昨日（と思われる日）の女性が着ていた服とほとんど同じデザインだ。そんなすぐに仕立てられはしないだろうし、お下がりなのかな。とそこまで思考が至つたところで、ここが何処なのか当たりをつけた。

「うーん、昨日の女の人の家、だろうなあ。倒れた後お世話になつちゃつたつてことか」

「あら、子供がそんなことを気にしなくてもいいのよ？」

「うひゃい！」

突然耳元で囁かれ、驚いた私は奇声を発しながら体を跳ね上がりせ
る。その際、ごちんと音がして肩に鈍い痛みが走つたけど、そんなこ
とを気にする余裕もなく勢い良く振り返つた。

「ちよ、いきなり声をかけないでくださいびっくりしたあ！　という
か、いたならもう少し早く声を……って、どうしたんですか？」

「ふ、ふふふ……大丈夫よ、あなたの肩が私の頸にクリーンヒットした
なんて事実は全く無いわ。これは、そう……ちょっとダンゴムシの気
分を味わつてみたくなつて。それで蹲つてるのよ……」

「それは精神状態としては大丈夫の部類に入らないのでは……？
えつと、なんかごめんなさい」

若干自業自得な気もするけど、それを口にだすのは忍びなかつたら
く素直に謝罪の言葉をかける。大丈夫よ、大丈夫だからもう少しこの
ままで居させて、と涙目でこつちを見てくる女性に頷くと、回復する
まで対面で座つて待つた。

少ししてから回復したのか、目の端から零を滴らせながら安心させ
るよう笑いかけてくる。どう見ても無理して笑つてるようにな
見えないけど。

「えつと、相当痛かつたんですね……本当、ごめんなさい」

「う、ううん。私もあそこまで驚くとは思つてなかつたから、まともに
入つちやつたの。もう大丈夫だから」

「そうですか……あ、えつと。昨日、でいいんですよね。その節は助け
ていただきありがとうございました。こんな、服まで貸してもらつ
てしまつて……」

「ええ、昨日は災難だつたわね。あまり見かけなくなつてきていると
はいつても、まだまだ居なくなつたわけじやないもの。一人で出歩く
には、いささか危険だつたわね」

「ええと……ああいうのつて、このあたりだとよく出るんですか？」

「え？ そうね、一週間に一体くらいは見かける程度だけど……あなた、見たことなかつたのかしら？」

「はい……あんな化物、初めてみました」

「そう……だつたら余計に、災難だつたわね。あれは妖怪つて言つて、人の畏れを源に存在しているものよ。例えば、あなたは真つ暗闇つて怖いと思うでしよう？」

「そうですね……何がいるかわからないですし、何かが居てもきがつけないですし」

「その『何かがいるかもしない』つて畏れが生み出した存在、それが妖怪よ。いわば、私達の子供つて感じかしら」

「あんな子供は遠慮したいですね……」

「ふふ、そうねー。私としては、あなたみたいな可愛い子が子供だと嬉しいかしら」

「え、いや、あの……」

「んー、でもちよつと肌がしろすぎるかしら？ これはこれで綺麗だけど、少し不健康にも見えちゃうわね……」

「えつと、見えてますかー？ というか、聞こえてますかー？」

「決めた、今日からあなたには栄養のあるものを食べてもらうわね！」
「ダメだ聞こえてないやこれ……子供つて話からどんどんずれて、つて何処に行くんですか？ あの、ちょっとと？」

呼びかける声が届いていないのか、何やら気合を入れた様子の女性は足早に部屋を立ち去つてしまつた。

その光景に呆然とするしかなかつた私が再起動するまでに、数分の時間をしてしまつたのは仕方がないことだつたと思う。

つていうか、なんだかんだずつと厄介になるなる未来が見えるような……？

うん、気にするのはやめよう。取り敢えず、後を追いかけてみようかな……

美味しければ問題ないよね

部屋を出ていつてしまつた女性を追いかけて、私も部屋の外へと踏み出す。縁側から見て見る限り、周りは森に囲まれていてご近所さんらしき建物はない。森は静かそのもので、私が感じた恐ろしさはもはや微塵も感じられない。

昨日のこと思い出して少しだけ体を震わせた私は、それを振り払うように頭を振ると女性の背中を追つて歩を進める。

女性が入つていった部屋を覗いてみると、どうやら炊事場だつたらしく色々と料理道具が並んでいる。そんなところに立つ女性は、なんとなく「お母さん」という感じがしてとても似合つてる気がする。

ぼうつとその様子を眺めていた私に気がついたのか、女性は微笑を浮かべて小首を傾げる。その動作で我に返ると、私は少し照れながら目を逸らした。

「あら、お手伝いに来てくれたのかしら？　でも、これくらいいいのよ。座つて待つてくれればすぐに作っちゃうから」

「え、あ、いえ……でも、看護して貰つたのにご飯まで作つてもらうのは」

「ふふ、迷惑がかかる？　大丈夫、私前々から娘がほしいなつて思つたの。お料理を作つてあげるつて、なんだか家族にしてあげるみたいで楽しいのよ」

「そうなんですか……でも、お手伝いくらいは」

「あなた、結構大怪我だつたのよ？　だから、思わないところで体が動かないかもしれないし、危ないわ。だから、私に任せてちょうどいい」

微笑みながらそういう女性に對して、私も強くはでれない。そんなに大怪我を負つたつもりもないし、今はもうなんともないけど、ここで無理してまた迷惑をかけてしまうのはいただけない。

仕方なしに、女性に促されるまま奥の部屋へと進む。そこにはちやぶ台やら簾やらが置かれていて、私が元いた部屋よりかは生活感が

あつた。

ちやぶ台の傍らにちよこんと腰掛けると、改めて部屋を見回してみる。生活感があるとは言つたけど、それでもおいてあるものは限りなく少ない。まさに食つて寝るためだけの場所といった具合で、不必要なものは一切おいていない。

極限まで切り詰めて考える人なのか、それとも単純に内装に興味が無いのか、それとも別の理由かなのかはわからないけど、取り敢えずこのことは頭に入れておこうと思う。

と、そんな時女性が料理をしている方角から、ものすごい物音がする。なんというか、何かを思いつきり叩きつけるような音や、硬いものが碎ける音、はては何かが弾けるようなバチイツ、という音。

おかしいな、私の知っている料理はあんな音を立てるものじやなかつたはずなんだけど……

不気味に思つていると音がピタリと止み、不気味な静寂に包まれる。もしかしたら何かあつたんじゃ、と不安になり始めた頃、襖を開けてお盆を手に持つた女性が部屋に入ってきた。

「あの、何かあつたんですか？　すゞい音がしましたけど……」

「ああ、少し失敗しちゃつて。お料理は久しぶりだつたから、少し手間取つちやつたの」

困つたように笑う女性が、私の前に料理を並べてくれる。ホカホカの白いご飯に、きつね色の焦げ目がついた焼き魚。たくあんとお味噌汁という典型的かつ実に美味しそうなラインナップだ。

これを作る過程でどうやつたらあんな音が出るのかは甚だ疑問だけど、目の前に食べ物が出された瞬間鳴き始めた私の腹の虫をなだめるためにも、そんなことを気にしている余裕はない。

「どうぞ、召し上がり。たくあんは貴い物だから、口にあうかはわからないけど」

その言葉に従つて、手を合わせるのもそこそこに食事にありつく。白いご飯はふわっとしていて、少ししょっぱいたくあんとの相性は最高だつた。お味噌汁も濃すぎずうすすぎない絶妙な味加減で、魚の焼きも丁度いい。

夢中になつて食べていると、ふとこちらを優しげな目で見つめる女性の視線とぶつかる。口元には優しげな笑みが浮かんでいて、まるで近親者に向けるような表情をしている。

そこでふと、私の姿を客観的にみたら相当恥かしいことに気が付き、かつくらつていた手を止めて味わつて食べるよう心がける。

「あら、おかわりもあるから遠慮しなくてもいいのよ？ それとも、お口に会わなかつたかしら？」

「いえ、大丈夫です。量もちょうどいいですし、どれもどつても美味しいです。いつもこうして自炊しているんですか？」

「いいえ、いつもは里に降りてそこで済ませているの。私、あんまりお料理得意じやないから」

「全然そんなことないです。とても上手だと思います」

「ふふ、ありがとね」

何かがおかしかつたのか、くすりと笑つた女性はその後は喋りかけても来ず、ただじつと私の食べる様子を見ているだけだつた。

なんとも食べにくい状況だけども、かといつてそれを嫌といえるわけもなく、大人しく食べることだけに集中した。

食べ終わるまでに時間はそうかからず、腹の虫も収まつた私は大満足だつた。

結局、あの音がどの過程で出されたものだつたのかは見当がつかなかつたけど。

私は一体何でしよう？

「そういえば、まだ名前も何も聞いていなかつたわね」

「え……？ あつ」

お腹もいっぱいになつて満足していたところで、女性が本題といったふうにそう切り出してきた。そういうわれれば、お互いに名前を知らないばかりか素性さえわからない状況だ。

助けてもらつた上に、ご飯や寝床まで提供してもらつていてのに自分の身の上を話さないなんて、なんとも不義理なことだ。
という訳で、早速居住まいを正すと女性に向き直る。

「えっと、私の名前は……」

「名前は？」

「名前は……なんでしたつけ？」

「まだ聞いてないから、ちょっとわからないわね……」

あれ、おかしいな。自分の名前がどうしても思い出せない……？
いや、もしかしたら気が動転していて、一時的に忘れちゃつてるだけかもしれない。という訳で名前はひとまずおいておいて、他のことから話していく。

「……って、あれ？ そもそも私つてなんであそこにいたんでしたつけ？」

「何も覚えてないの？」

「えっと、そうみたいですね……」

心配そうな女性の顔を見ながら、私は必死で自分の持つている記憶のお糸を手繰り寄せようとする。

気を失う直前、この女性に助けてもらつたことは覚えている。それより少し前、あの化物から必死になつて逃げていたのも思い出せる。

——なら、そもそもあそこに居た理由は？　化け物に襲われたきっかけは？

「ぜ、全然思い出せない……」

おかしなことに、私が覚えている記憶の中で一番古いものは、化物に追われている最中の記憶。

まるで生まれたときから追われていたと錯覚するほど、追われ始めた記憶がなくただただ記憶の始まりは逃走の部分から。

いくらなんでも、この頭記憶領域がガバガバすぎじゃないだろうか？　逃げてる最中は疑問にすら思わなかつたけど、いくらなんでもこれは酷い……

「一種の記憶喪失、かしらね……自分に冠することは、何も思い出せない？」

「あの化物に追われているところから前には、なんか遡れないです……」

「そう……まあ、それならしようがないわね」

優しげな視線を向けてつつ頭をなでてくれる女性に、私は自分の中の混乱が不思議と和らいでいく感覚を覚えた。

撫で方自体は少し恐る恐るといった体で、慣れている感じはしなかつたけれども、雰囲気で包み込まれるような、見えないけれども温かい何かのお陰で自然と表情がほころぶのを感じる。

「まあ、あなたが記憶を失つてしまつた不思議ちやんだつてことがわかつただけでも収穫ね」

「ごめんなさい、自分のことなのに……」

「大丈夫よ。さてと、今度は私の自己紹介と行きましょうか」

私を撫でる手を止めてそのまま腰に手をあてがうと、まるで自慢す

るかのようにその豊満な胸を張つて自分の名を名乗り始める女性。
どうでもいいけど、その行動は私を含め世の一部女性達に対する宣
戦布告と見ていいのだろうか。

「私は博麗神社の巫女。この近くにある人里の監視者にして守護者。
そしてあなたの命を救つた腕のある妖怪退治の専門家よ」

「随分肩書が多いんですね……それでえっと、お名前は？」

「んー、皆に巫女巫女言われたせいで、肝心要の本名が思い出せないの
よね……だから、気軽に巫女さん、またはお母さんって呼んでもいい
のよ？」

「そ、そなんですか……ええと、それでは博麗さんで」

「お母さんって呼んでもいいのよ？」

「は、博麗さんで……」

何故か笑顔のままこちらに寄つてくる博麗さんにおののきながら
も、流石にお母さんと呼ぶのは抵抗がありすぎるのやんわりと拒絶
の意志を見せる。

それを悟ったのか、少し残念そうに顔を話した博麗さんは、ピッと
人差し指を立てて私を指差した。

「そしたら、今度はあなたの名前ね。名前がないっていうのは不便だ
ろうから、思い出すまでの間代わりに付けてあげるわ」

博麗の巫女は人の心がわからない（偽）

「名前、つけてくれるんですか……？」

「ええ、私としてもそのほうが便利だもの。それとも、嫌？」

「い、いえ！ そんなことは」

確かに、何をするでも名前がないというのは不便だろう。どんな名前がつけられるのか不安なところではあるけど、ここはおとなしく任せてみよう。

「んー……そうね、外見は白いところが目立つけど、目は真っ赤だし。見た感じはお人形さんみたいで、儂い感じの美少女なのよね……」「え、えと……あの……」

ブツブツと私の特徴を呟く博麗さんに、若干の抗議の目を向ける。名前をつける上で特徴を抑えていってるのはわかるんだけど、本人の前でその特徴を並べるというのは、こつ恥ずかしいというか、一種の拷問のようなものなのだ。

「ああ、ごめんなさいね。んつと、白夢っていうのはどうかしら？ 白はそのまま外見が白いからで、夢は儂いの一部から取つてるの」「白夢……はい、そこまでこつてもらわなくとも、いつかは自分の名前も思い出せるでしようし。それに、いい名前だと思います」「うん、それじゃこれからは白夢ちゃんって呼ぶことにするわね」

どことなく満足したように何度も頷いている博麗さんを見て、不思議な感覚を覚えながらも私も笑顔になる。

博麗さんは、何処かお母さんといった母性を發揮していながら、一方では子供っぽい一面もあるのだ。たった数時間の付き合いでしかないのだが、それでもここまでわかるくらいには博麗さんはアップダウンが大きい。

「さて、名前も決まったことだし、人里に降りてみましようか」

「え？ なんですか？」

「なんでつて、よそ者はあんまり歓迎してくれるところじやないから、白夢ちゃん一人でいくより私といつたほうがいいかなって。それに、私も依頼の報告とか新しい依頼を受けたりしないといけないし」

言われてみればその通りで、みんなが皆博麗さんのように見ず知らずの人にもやさしくしてくれるわけもない。人里でもある程度の知名度があるであろう博麗さんについていつたほうが、一人で行くよりも何倍もいいはずだ。

私はそう考えて、博麗さんの提案に乗ると一緒に人里へと降りていった。

「あ、当代。いつもご苦労様です」

「そちらこそ、いつも里周りの警戒ご苦労様です。依頼の報告に來たので通してもらつてもいいですか？」

「ああ、そういうえばはた凶暴なのがでたんでしたつけ。最近は少なくなってきたと思つたんですが、出るときはまだ出るんですね」

博麗さんと人里付近まで来た時に、道に槍を持つた武装をしている人を見かけた。博麗さんとの会話を聞く限り、人里へ悪いものが近寄らないようにと守っている門番なのだろう。

何でもないような会話をしつつ門番の人が道を開けてくれようと体を動かし、私と視線がぶつかる。しまつた、邪魔したら悪いと思うて声をかけなかつたけど、これじゃ逆に怪しいだけだ。

「あ、えつと、ここにちは……」

「あ、うん。ここにちは。当代、この子は？」

「ああ、ちょっと妖怪に襲われていたのを助けてあげてね。記憶喪失

みたいだから、一時的に預かってあげてるの」

「ふーん……お嬢ちゃん、当代に変なことされそうになつたら人里に逃げてくるんだよ?」

「へ? えつと、はい……?」

突然表情を引き締めてそう警告してくれる門番の人に、私は戸惑いつつもなんとか返事をする。

どういうことだろうか、博麗さんが何か変なことをする人にはとても見えないのだが、何か裏事情のようなものがあるのだろうか。

「ちよつと、私が変なことするかの如きデマを教えるのはやめてちようだい。私が一体何をするつていうの」

「前々から娘がほしいほしいいいいつも、結婚するはなんか嫌だつていつていたあなたが、記憶を失った女の子にしそうなことといえば、一緒にお風呂に入つたり一緒に寝たり、とかじやないですか?」

「……? それの何がいけないの?」

キヨトンとする博麗さんに、呆れた表情でな? という顔を向けてくる門番さん。

いやあの、娘と思ってくれるのは嬉しいけど、一緒にお風呂とか一緒に寝るっていうのはちよつと恥ずかしいから遠慮したいなあ……。

「兎に角、幼気な女の子に手を出しちゃダメですよ。つと、そういうえば依頼の報告があるんでしたね。ようこそ、人里へ」